

病、先天性滲血性黄疸で四肢末端骨に至る迄の鮮明な、広汎な骨髓像を得られたのに対し、ヘモクロマトーシス、パンチ氏病、血友病B、妊娠性葉酸欠乏性貧血では正常とほぼ同等ないしやや低下の像を示した。ほぼ同時期に行った ^{59}Fe 鉄代謝での体外計測分布、末梢血液像、血清鉄、骨髓赤芽球百分率の成績と $^{99\text{m}}\text{Tc}$ 骨髓摂取及びその分布とは必ずしも一致しなかった。

19. 甲状腺の別出標本からみた ^{131}I 治療の影響

重光隆雄 笹尾哲郎
(広島大学 原医研外科)

^{131}I 治療の甲状腺に対する病理組織学的変化を究明し、その及ぼす影響について検討することを目的とした。

^{131}I で治療された既往のあるもので、甲状腺切除を受けた11例を対象とした。此等は全て既往に甲状腺機能亢進症があり、 ^{131}I $4\text{mci} \sim 20\text{mci}$ が投与されており、治療後経過期間は最終投与後11カ月～10年に及んでいる。この11症例について臨床の事項と共にその病理組織学的変化について検索した。

臨床の事項で3症例がⅢ度の甲状腺腫、び慢性プラス結節で ^{131}I 治療後結節が残存した。

^{131}I 治療後結節の出現をみたもの4例で、3年2カ月～10年の経過後結節出現をみている。

以上の5症例は共に甲状腺機能は ^{131}I 治療により正常に復している。

なお、 ^{131}I 治療に抵抗して $17 \sim 20\text{mci}$ と可成りの量が投与されても全治に到らず、亜全別の追加がなされたものの4例がある。

病理組織学的事項で7症例の結節部分は濾胞の大小不同があり、濾胞上皮に巨細胞の出現を全例に、異型核細胞の出現も4例に認めた。間質結合組織の増殖、游走細胞の浸潤も全例に認めた。結節以外の部分では濾胞上皮の変性萎縮がみられた。

機能亢進残存の4症例では、濾胞並びに濾胞上皮の変性萎縮が2例にみられた。濾胞上皮に巨細胞及び異型核細胞の出現は1例にみられた。 ^{131}I 治療による晩発性影響として目立った点は、巨細胞、異型核細胞の出現頻度の高いことであった。特に後に結節を作って来た症例で、1例に明らかな癌を認めたことは注目すべきことと考えた。

質問：兵頭春夫（愛媛県立中央病院放射線科）①対照

とされた総疾患数 ②甲状腺癌であった症例について ^{131}I の最初の投与時の病理組織像について。

答：重光隆雄（広島大学原医研外科）①本症例は他病院での治療例であり、頻度についてお答え出来ない。②残念乍ら行っていない。

討議：江崎治夫（広島大学原医研外科）ABCCの研究によると、非被爆者の解剖例よりの甲状腺癌発見率は17%で、被爆者で、それよりやや多い発生率を発表されています。しかしこれらの大部分は、臨床レベルの癌ではなく、病理のレベルの癌です。放射線による癌の発生は癌が新しく発生するの、存在していた癌が臨床レベルになるのか、どうかと云う点を検討すべきものと思います。

追加：阿武保郎（鳥取大学放射線科） ^{131}I 治療後の甲状腺癌の発生については我々の研究班（放射線影響）の調査では、我国11,000例中約7,500例の個人票を得、その60%の追跡中で3例である。放射線との関係有意性は統計的に検討の要があらう。

20. ^{198}Au コロイド関節腔内注入による慢性膝関節水腫治療について

(放) 鴛海良彦 松浦啓一 樋口武彦
(整) 小川加弥太 高岸直人
(広島赤十字病院・広島原爆病院)

1963年、Makin らが、慢性膝関節水腫に対して ^{198}Au コロイド(60μ)を膝関節腔内に注入する治療法を発表して以来、各国で追試が行われ、いづれも良好なる結果を得ている。

我々も数年前よりこの治療法に関心を持っていたのであるが、最近第一化学の好意で 60μ の大粒子を持つ ^{198}Au コロイドをフランスより輸入する事が出来るようになったので従来の ^{198}Au コロイドによるものと合せて14症例、16膝関節について報告する。

〔方法〕症例は、数年間あらゆる治療に抗した慢性膝関節水腫で40才以上の患者を選んで治療した。 ^{198}Au コロイド 10mCi を膝関節腔内にまんべんなく充分に行きわたるように数分間膝運動をくり返す。注入后、膝関節センチをとってコロイドの分布が良好か否か確認。注入后、24時間の尿、血液採取、関節液の一部採取して計測。又、注入後、1, 3, 5, 10日の4回、膝関節、肝の体外計測及び全身線スキャンニングを行った。治療効果の判定は、経時的な排液の有無及びその量でみた。